

干潟の名称	浜名湖
干潟の所在地	静岡県、浜名湖南端（いかり瀬）
干潟の面積	12ha
干潟の地形タイプ	中洲干潟
干潟の底質	砂質
干潟植生	いかり瀬の陸部分にはハマヒルガオ、ハマボウフウ、ハマダイコン群落が見られる。潮下帯にはアマモ場が広がっている。
干潟の特徴	広大な汽水湖である浜名湖とその南にある遠州灘（太平洋）との間の連絡水路を、今切口という。水路の幅は約 200m である。いかり瀬は、今切口から浜名湖に入ってすぐのところに位置し、干潟は草で覆われた東西に長い楕円形の中洲の周囲に発達している。北東岸には大鳥居がある。「潮干狩のメッカ」（環境庁野生生物研究会 1990）とされ、前回調査時（1994 年）には、観光客のために対岸（JR 弁天島駅南）の渡船場から渡船が出ていた。しかし、今回（2002 年 5 月）は、渡船が廃止されていた。渡船業者によると、アサリの不良が原因の由。還元層は、前回調査時には北岸の方が南岸よりもはるかによく発達していた（還元的であった）が、今回は逆転していた。すなわち、北岸（B）は表層 10～30cm 以深で還元層が見られたが、南岸（A）ではそれがわずか 3cm 以深となっていた。
生物相の特徴	アマモとコアマモが潮下帯に比較的高密度で繁茂しており、北岸では潮間帯下部にも出現する。南岸では、イボキサゴやスジホシムシモドキがかなりの密度で出現し、スジホシムシやそれに着生するスジホシムシヤドリガイ、ミドリユムシ、ツバサゴカイ科の 1 種（棲管）も発見され、ミサキギボシムシも採集された。調査区域外にはワダツミギボシムシの糞塊が多数見られたほか、補完調査（2002 年 5 月 28 日）においてキヌタアゲマキが認められた。北岸では、ハマグリが低密度ながら発見された。なお、2005 年 7 月には、ヒガシナメクジウオ <i>Branchiostoma japonicum</i> が初めて発見された（木村昭一、未発表）。
調査者氏名	西川輝昭、木村昭一、木村妙子
調査年月日	2002 年 5 月 12 日

干潟の名称	汐川干潟
干潟の所在地	愛知県豊橋市，田原市
干潟の面積	280ha
干潟の地形タイプ	河口干潟
干潟の底質	干潟の東側は砂泥底，西側の川筋や濇筋付近は軟泥底，流入河川の河口はヨシ原湿地が発達する。潮間帯上部の一部には人為的な石積が帯状に連なる部分があり，その下は軟泥底でカキ礁が発達する。今回の調査地の底質は，いずれも砂泥底で表層 0.5 ないし 1 cm だけが酸化的であり，その下は還元層となっていた。
干潟植生	ヨシ原が流入河川の河口を中心に潮上帯から潮間帯中部にわたって広く分布する。シオクグ，シバナ，ハマツナ，フクドの小群落が潮間帯中部に見られる。潮上帯にはわずかにハマボウ，セイタカアワダチソウ群落が見られた。干潟全体の植生の面積は約 3.9ha であった（藤原ら，2002）。
干潟の特徴	三河湾の奥，豊橋市と田原町の境界にある田原湾に位置し，汐川，境川，蜷川，仁皇川および紙田川の河口に広がる河口干潟である。かつては 2000ha もの広大な干潟および浅海域だったが，1961 年から続けられている三河湾の埋め立て開発事業により，現在の田原湾は三河湾とは幅 700m の水路でつながる閉鎖的な内湾に改変され，干潟面積は約 280ha に縮小した。藤前干潟とならぶ国内有数の渡り鳥飛来地として有名である（藤岡・木村，2000）。
生物相の特徴	<p>今回の調査は，干潟の東側の湾口部（A）と湾中央部（B）の 2 ライン各 3 カ所で調査を行った。調査では 35 種の動物と 1 種の藻類が確認された。湾口部の調査地では，潮間帯上部から中部の底土表面にウミニナ，ヘナタリが多数這い回り，これらの死殻を利用するユビナガホンヤドカリが多かった。還元化した泥中には，オキシジミとコケゴカイ，ミナミシロガネゴカイが優占していた。潮間帯上部ではアナアオサが底土を覆い，潮間帯中部にはカキ礁が見られた。潮間帯の中央部から下部の底土表面にはアラムシロとウミニナ，ホソウミニナ，ユビナガホンヤドカリが多く，底土中にはオオノガイ，チロリ科の <i>Grycera macintoshi</i>，タマシキゴカイ，ミナミシロガネゴカイが多かった。ここでは現在は生貝がほとんど見られないサビシラトリやアゲマキの死殻が見られた。湾中央部の調査地も分布傾向は類似しているが，湾口部では少なかったカワグチツボ，ミズヒキゴカイやアナジャコが潮間帯下部で多かった。ツバサゴカイ棲管も確認された。</p> <p>2002 年 4 月に行われた干潟とヨシ原湿地での予備調査では，今回記録された種の他に，干潟では****，カワアイ，ウミゴマツボ，ヌカルミクチキレ，ヤミヨキセワタ，クレハガイ，ホトトギス，ソトオリガイ，コオキナガイ，スナイソゴカイ，ヤマトオサガニ，チゴガニ，ヨシ原内ではタテジマイソギンチャク，フトヘナタリ，タマキビ，カワザンショウガイ，ムシヤドリカワザンショウ，クリイロカワザンショウ，ヒラドカワザンショウ，ヨシダカワザンショウ，ツブカワザンショウ，****，****，ヒロクチカノコ，クロベンケイガニ，ヒメアシハラガニ，カクベンケイガニ，ウモレベンケイガニ，**** が確認された。</p> <p>2004 年 9 月に行われた冠水時の干潟での底引き網調査では，スズキ幼魚，ボラ，マハゼ，****，ツノヒラムシ上科の 1 種 <i>Planoceroidea</i> sp. が確認された。</p>
調査者氏名	西川輝昭，木村妙子，藤岡エリ子
調査年月日	2002 年 5 月 13 日 (予備調査：2002 年 4 月 13 日/底引網調査：2004 年 9 月 20 日)

<引用文献>

藤岡エリ子・木村妙子（2000）三河湾奥部汐川干潟の1998年春期における底生動物相．豊橋市自然史研報，10:31-39.

藤原直子・木村妙子・藤岡エリ子（2002）三河湾汐川干潟の塩性湿地植生．豊橋市自然史研報，12:41-48.

干潟の名称	矢作川河口
干潟の所在地	愛知県西尾市
干潟の面積	地点Aは約3ha（第5回湿地調査の地図による）、他は不明。
干潟の地形タイプ	河口干潟
干潟の底質	やや粗い砂質
干潟植生	ヨシ原には、ヨシ、シオクグ、ウラギクが生息。
干潟の特徴	矢作川河口部の両岸に沿って細長く続く干潟。調査地点は左岸の河口近く（A）とそのやや上流（B）、およびその間に広がるヨシ原。A地点は、表面の酸化層が3～6cmと比較的発達。B地点では、酸化層の発達程度は場所により変化が大きく、岸近くでは30cmにも達した。B地点では、地元の人に混じって観光客がマシジミを採っていたが、「本年は不作」とのこと。
生物相の特徴	A地点において、砂表面にはウミナナやコメツキガニが普通に見出され、掘り返すとソトオリガイや多毛類の数種（特にイトゴカイ科 <i>Heteromastus</i> 属の1種）が高密度で生息していた。それより上流のB地点における生息種数はA地点よりもはるかに少なく、マシジミとヤマトカワゴカイもしくはヒメヤマトカワゴカイのみであった。ヨシ原には、クロベンケイガニ、アシハラガニ、アカテガニ、クリイロカワザンショウ、カワザンショウガイ、ムシヤドリカワザンショウなどが見出された。
調査者氏名	木村妙子、藤岡エリ子、西川輝昭
調査年月日	2002年5月14日

干潟の名称	三河湾（一色干潟）
干潟の所在地	愛知県一色町
干潟の面積	調査した衣崎地先（通称「百間州」の一部）は約 70ha（第 5 回湿地調査の地図による）
干潟の地形タイプ	前浜干潟
干潟の底質	砂質
干潟植生	
干潟の特徴	一色干潟は、三河湾中央部の北岸にあり、一色町と吉良町の境を流れる矢作古川によって形成された広大な前浜干潟で、アサリの潮干狩り場として、いくつかの漁協によって厳しく管理されている。調査は、衣崎地先（通称百間州の一部）で行われた。還元層は岸に近いほどよく発達する傾向があり、岸近くで表層 1cm 以深に広がる一方、沖側では 5～30cm 以深となる。
生物相の特徴	アサリをはじめ、生物相は比較的豊富であった。干潟表面にはコアマモやオゴノリが散在し、コメツキガニ、ホソウミニナ、アラムシロ、ホトトギスガイが高密度に生息したが、ウミニナは発見されなかった。掘り返すと、リネウス科のヒモムシ類、シオフキ、チロリ科の <i>Glycera macintoshi</i> 、ミナミシロガネゴカイ、ミズヒキゴカイ、ミサキギボシムシなどが高密度で発見された。イシワケイソギンチャクやツバサゴカイ（棲管）も認められた。
調査者氏名	藤岡エリ子、西川輝昭、木村妙子
調査年月日	2002年5月16日

干潟の名称	雲出(くもず)川河口
干潟の所在地	三重県一志郡三雲町
干潟の面積	
干潟の地形タイプ	河口干潟
干潟の底質	砂泥ないし砂質で、沖に向かうに従って酸化層がよく発達する(還元層が3~4cm以深)。
干潟植生	潮上帯の砂質底にハマヒルガオやマツヨイグサ類が見られる。
干潟の特徴	雲出川河口右岸に広がる、広大な干潟。
生物相の特徴	ムシモドキギンチャク科の1種、ホソウミニナ、ユビナガホンヤドカリ、コメツキガニ、ヤマトキョウスチロリ、チロリ科の <i>Glycera macintoshi</i> 、コケゴカイ、ミズヒキゴカイ、そしてミサキギボシムシが高密度で生息していた。スゴカイイソメの棲管も目だった。外来種のサキグロタマツメタも発見された。
調査者氏名	木村昭一、木村妙子、西川輝昭
調査年月日	2003年6月16日

干潟の名称	櫛田川河口
干潟の所在地	三重県松阪市
干潟の面積	
干潟の地形タイプ	前浜、河口干潟
干潟の底質	砂質、砂泥質、砂礫質
干潟植生	ヨシ・アイアシ・フクド群落 ハマボウ、ムシトリナデシコ、ハマゴウ、カナビキソウ、キバナノカワラ マツバ、アオツツラフジ、ヒメヤブラン、カワラナデシコ、セイタカアワ ダチソウ、ヤブカンゾウ、カワラサイコ、サボテン、クララ、ハママツナ、 ケカモノハシ、ホソムギ、コマツヨイグサ、メマツヨイグサ、ギョウギシ バ、ハリエンジュ（ニセアカシア） （2003年7月14日調査、豊橋市自然史博物館学芸員、藤原直子氏同定）
干潟の特徴	伊勢湾に注ぐ櫛田川河口に形成される前浜・河口干潟である。広さ、地形 の複雑さ、動物相や植生の多様さのどれをとっても、伊勢湾沿岸で最高の 干潟。護岸堤が建設されているが、その海側に、後背湿地、塩生湿地とそ れに続く干潟が広範囲に広がる。以前はアサリの豊産地だったが、近年漁 獲が激減した。特に川側は、恒常的に護岸工事が行われているためか、環 境が単調になりつつある。継続的な監視が必要。沖側に設置した地点Aは 砂質底で、還元層が30cm以深と深く、よく酸化されている。川の中に設 置した地点Bの底質も同様によく酸化されているが、粒度の均一性は低く、 泥・砂・礫が混じっている。
生物相の特徴	A地点（沖側）ではアマモの打ち上げが見られ、ナミヒモムシ、ウミニナ、 クチバガイ、オチバガイ、チロリ科の <i>Glycera macintoshi</i> が優占し、ヒ モイカリナマコも稀ではなかった。外来種のサキグロタマツメタがこの干 潟としては初めて確認された。B地点（川の中）にはウミニナとフトヘナ タリが多く、その殻を利用するユビナガホンヤドカリも多い。ヒモイカリ ナマコが特に潮間帯上部に多かった。コメツキガニやケフサイソガニも比 較的高密度で生息していた。ヨシ原内ではフトヘナタリ、****、ハマガニ が発見された。潮干狩りでハマグリをいくつか手にしている人を見かけた ので、本種がこの干潟に低密度ながら生息していることがわかった。
調査者氏名	木村妙子、藤原直子、安田葉子、北川純
調査年月日	A: 2003年5月15日、B: 2003年6月2日、植生調査: 2003年7月14日

干潟の名称	祓川（はらいがわ）河口
干潟の所在地	三重県多気郡明和町
干潟の面積	
干潟の地形タイプ	河口干潟
干潟の底質	砂泥ないし軟泥質で、滞筋近くでは足が深く埋まる。還元層は 1～3cm 以深。
干潟植生	ヨシ、シオクグ、フクド、セイタカアワダチソウ
干潟の特徴	祓川左岸にある堤防沿いの干潟で、ヨシ原がよく発達する。
生物相の特徴	泥底では、ヘナタリ、フトヘナタリ、カワアイといった希少な貝類、ハサミシヤコエビやアナジャコ、アシハラガニなどの甲殻類が比較的高密度で棲息していた。植生内では、ヘナタリ、フトヘナタリ、イシマキ、カワアイ、カワザンショウガイ、クリイロカワザンショウ、ムシヤドリカワザンショウ、アシハラガニ、チゴガニ、クロベンケイガニが多くみられ、さらに、稀には、****や****などが発見された。多毛類は多くなかった。
調査者氏名	西川輝昭、木村妙子、木村昭一
調査年月日	2003年6月16日

干潟の名称	藤前干潟
干潟の所在地	愛知県名古屋市
干潟の面積	122ha
干潟の地形タイプ	河口干潟
干潟の底質	底質は淘汰の良い砂質底，潮間帯上部では砂礫質（ライン A）で還元的環境。
干潟植生	新川河川内に濃密なヨシ群落が発達する。
干潟の特徴	伊勢湾の最奥部に注ぐ庄内川，新川と日光川河口に形成される河口干潟である。汐川干潟とならぶ日本有数の渡り鳥飛来地で，ラムサール条約指定の干潟である。大都会からほど近い干潟として貴重である。干潟面積は広いが地盤高はかなり低く，岸に滞筋があるので，干潟上へ上陸できる時間が短い。底質は淘汰のよい砂質底である。新川の中には濃密なヨシ原が広がるが，護岸により潮間帯上部は失われている。日光川にもヨシ原があるが，河口に堰があり，塩生湿地はない。
生物相の特徴	今回の調査は河口干潟（ライン A）と河川内のヨシ原湿地において行われた。その結果，46種の動物が確認された。 干潟の潮間帯上部にはテトラポットに付着したマガキ礁が発達する。2002年にはテトラポットの中にチチュウカイミドリガニが多く見られたが（木村未発表資料），今回は全く確認できなかった。外来種のコウロエンカワヒバリガイ，絶滅危惧種のヒロクチカノコや****，イシマキが優占する。潮間帯下部はイシマキ，ヤマトシジミ，ソトオリガイ，ウミゴマツボ，****，ナミヒモムシが優占する。アナジャコ，ニホンスナモグリも多く見られる。 新川内のヨシ原湿地にはヒロクチカノコ，カワザンショウガイが多い。****が目視確認された。ごくわずかであるが，フトヘナタリが生息していた。
調査者氏名	木村妙子・木村昭一・大島寛俊・菅沼俊哉
調査年月日	2004年8月14日

干潟の名称	木曾三川
干潟の所在地	三重県桑名市長島町
干潟の面積	
干潟の地形タイプ	河口干潟
干潟の底質	河口部（ライン A）は淘汰のよい細砂底の人工干潟であり、還元層は 30 cm 以深と酸化環境である。岸付近には護岸のためのテトラポットがある。河川内の干潟（ライン B）の底質は酸化的環境の砂泥質であった。その潮間帯上部に礫砂底の広大なヨシ原湿地が形成されているが、護岸により潮間帯最上部の湿地環境は全く失われている。
干潟植生	河口部にわずかにオゴノリが見られる。河川内の干潟にヨシ、シオクグ群落形成される。
干潟の特徴	伊勢湾に注ぐ揖斐長良川、木曾川のうち、揖斐長良川河口に形成される河口干潟を調査した。「桑名の焼きハマグリ」やヤマトシジミで有名な場所だが、長年の開発や水害防止のための埋め立てや護岸工事により干潟やヨシ原湿地は大きく減少している。この水域のヤマトシジミ漁獲は 1990 年代から 2002 年までに半分以下に減少している（水野・関口，2006）。1995 年には長良川河口堰の運用が始まり、さらなる漁獲減少が懸念されている。そのため漁協によるハマグリやヤマトシジミなどの貝類の種苗生産が試みられている。河口部には自然の干潟はほとんど存在せず、人工干潟が作られているが、藤前干潟と同じく海岸近くに滞筋があり、かなり引かないと上陸が難しい。
生物相の特徴	今回の調査は河口部の人工干潟（ライン A）と河川内の干潟（ライン B）の 2 ラインにおいて行った。その結果、41 種の動物、1 種の藻類が確認された。 人工干潟では、シオフキが優占している。アサリ、マテガイ、ホトトギス、ナミヒモムシ、ケフサイソガニが普通に見られ、ハマグリがわずかに生息していた。河川内の干潟ではヤマトシジミが優占し、潮間帯上部にはコメツキガニが多い。ヨシ群落内にはクロベンケイガニ、ヒロクチカノコ、カワザンショウガイが優占していた。****が目視確認された。藤前干潟と同様、ウミノナ類、オカミミガイ類は認められない。
調査者氏名	伊勢田真嗣・上田芽美・木村妙子・南部亮元
調査年月日	2004 年 9 月 1 日

<引用文献>

水野知巳・関口秀夫（2006）木曾三川感潮域のヤマトシジミの漁獲量の変動．日本水産学会誌，72

干潟の名称	安濃川河口
干潟の所在地	三重県津市上浜町
干潟の面積	
干潟の地形タイプ	河口干潟
干潟の底質	安濃川河口域の底質は志登茂川よりも全体的に砂質である。河口部（ラインA）、河川内の干潟（ラインB）とも酸化的な粗砂環境。
干潟植生	河口部の砂州にシバ、ハマヒルガオ、マツヨイグサ類が見られる。
干潟の特徴	伊勢湾に注ぐ安濃川河口に形成される河口干潟。ヤマトシジミを採っている人が多い。志登茂川とは河口が隣接しているが、志登茂川が平地の入江的環境であるのに対して、安濃川は山間から流れ下るので、干潟の底質や生物相が両者で大きく異なる。安濃川河口干潟は志登茂川のそれよりも底質が砂質で酸化的環境。雨の流量増加により地形の変化を受けやすい。
生物相の特徴	今回の調査は河口部（ラインA）と河川内の干潟（ラインB）の2ラインにおいて行った。その結果、17種の動物が確認された。 河口部ではオチバガイ、ナミヒモムシが多かった。アサリや多毛類のヤマトカワゴカイもしくはヒメヤマトカワゴカイ、 <i>Glycera macintoshi</i> は潮間帯全体に分布しているが密度は低い。木村ら（1993）の1987年における両河川の全域調査では全く確認できなかったオチバガイがかなり生息していた。和田ら（1996）によりこれは絶滅危惧種とされており、注目すべきことである。河川内の干潟ではウミニナ、イソシジミ、ソトオリガイが生息する。潮間帯上部はコメツキガニが高密度で生息している。
調査者氏名	木村妙子、中村祐子、北川純
調査年月日	2003年9月23日

<引用文献>

和田恵次・西平守孝・風呂田利夫・野島 哲・山西良平・西川輝昭・五嶋聖治・鈴木孝男・加藤真・島村賢正・福田宏（1996）日本における干潟海岸とそこに生息する底生生物の現状. WWF Japan サイエンスレポート, Vol. 3, 182pp.

干潟の名称	志登茂川河口
干潟の所在地	三重県津市上浜町
干潟の面積	
干潟の地形タイプ	河口干潟
干潟の底質	志登茂川河口域の底質は安濃川よりも全体的に泥質である。河口部（ラインA）は潮間帯上部では酸化的な砂質底だが、下部では還元的な砂泥底。河川内の干潟（ラインB）は還元的な泥底環境で、川岸近くは軟泥底になっている場所がある。
干潟植生	なし
干潟の特徴	伊勢湾に注ぐ志登茂川河口に形成される河口干潟。春にはアサリやマテガイ取りでにぎわう。安濃川とは河口が隣接しているが、安濃川が山間から流れ下るのに対して、志登茂川は平地の入江的環境であるため、干潟の底質や生物相が両者で大きく異なる（木村ら、1993）。志登茂川河口干潟は安濃川のそれよりも泥っぽく還元的で、川岸近くには軟泥底になっている場所がある。沖側の調査ラインでは泥分が少ない。
生物相の特徴	今回の調査は河口部（ラインA）と河川内の干潟（ラインB）の2ラインにおいて行った。また、同年7月に三重大学の学生26名と定性調査を行った。その結果、47種の動物が確認された。河口部では潮間帯上部にコメツキガニとシオフキ、ナミヒモムシが優占していた。下部には濃密なホトトギスのマット状集団が形成され、マット内にアサリ、オウギゴカイ、イトゴカイ類が多かった。このホトトギスの集団は7月には全く認められなかった。木村ら（1993）の1987年における両河川の全域調査では全く確認できなかったハマグリやオチバガイなどの多くの種が7月の定性調査で確認された。特に和田ら（1996）によりこれら2種は絶滅危惧種とされており、注目すべきことである。河川内の干潟ではウミニナ、ソトオリガイ、ヤマトシジミ、オキシジミの貝類、ヤマトオサガニ、チゴガニ、ユビナガホンヤドカリ、アナジャコ類などの甲殻類や <i>Heterotastus</i> 属の1種が優占していた。
調査者氏名	木村妙子、中村祐子、北川純
調査年月日	A: 2003年9月26日（定性調査：7月2日、学生26人参加）、 B: 2003年9月23日

<引用文献>

木村妙子・名越 誠・関口秀夫（1993）隣接する河口干潟における底生動物の分布．三重大学生物資源学部紀要，10：165-174.

和田恵次・西平守孝・風呂田利夫・野島 哲・山西良平・西川輝昭・五嶋聖治・鈴木孝男・加藤真・島村賢正・福田宏（1996）日本における干潟海岸とそこに生息する底生生物の現状．WWF Japanサイエンスレポート，Vol. 3，182pp.

干潟の名称	英虞湾（小才庭南）
干潟の所在地	三重県志摩郡阿児町の英虞湾内
干潟の面積	
干潟の地形タイプ	前浜干潟
干潟の底質	岸側は礫まじりのよくしまった砂泥質で還元層は 3cm 以深だが、沖側に向かうとすぐに還元的な軟泥質に変わる。
干潟植生	ハマボウの小群落、および、その沖側に狭いヨシ原がある。
干潟の特徴	英虞湾北東部に位置する一肢湾の最奥を占める、ハマボウやヨシの群落と岩礁に囲まれた小規模な干潟。
生物相の特徴	ヘナタリ、ホソウミニナ、****、カワアイ、ユウシオガイ、マガキ、オキシジミ、シオヤガイ、マメコブシガニが比較的高密度で棲息。センベイヤワモチが稀に見られた。ヨシ原にはクロベンケイガニやアカテガニが生息していた。
調査者氏名	木村昭一、木村妙子、西川輝昭
調査年月日	2003年6月14日

干潟の名称	英虞湾（登茂山）
干潟の所在地	三重県大王町の英虞湾内
干潟の面積	
干潟の地形タイプ	前浜干潟
干潟の底質	砂質で、沖に向かうにしたがって酸化層が急激に厚くなる。
干潟植生	潮上帯にはハマボウ、ハマゴウ、ハマサジなどの塩生湿地が見られ、干潟後背は崖になり、ハイネズ、トベラ、ウバメガシなどの日本南部海岸植生が見られる。 その他にウバメガシ、テリハノイバラ、ナツグミ、ハマボッス、ウラジロ、ツワブキを確認（2003年7月14日調査、豊橋市自然史博物館学芸員、藤原直子氏同定）
干潟の特徴	英虞湾のほぼ中央部に位置し、真珠養殖場の奥にある小規模な干潟で、陸からの斜面に囲まれる。
生物相の特徴	ヘナタリ、ホソウミニナ、シオヤガイ、オキシジミ、コゲツノブエといった貝類、ヤマトキョウスチロリ、イワムシ、コアシギボシイソメ、ヒヤクメニッポンフサゴカイなどの多毛類、チゴガニやハサミシャコエビなど甲殻類が多少とも高密度で見られた。また、ツバサゴカイの1種の棲管が比較的高密度で見られ、そのなかには****が生息していた。なお、周辺の塩性湿地には****やフトヘナタリ、センベイアワモチが見出された。
調査者氏名	木村昭一、藤原直子、木村妙子、西川輝昭
調査年月日	2003年6月14日、植生補完調査：2003年7月14日

干潟の名称	五ヶ所川
干潟の所在地	三重県南勢町の五ヶ所湾内
干潟の面積	
干潟の地形タイプ	河口干潟
干潟の底質	礫まじりの砂（沖に向かうにつれて礫が少なくなる）
干潟植生	なし
干潟の特徴	河口に広がる砂礫底で、岸側は完全に護岸堤でさえぎられている。底質はやや還元的（還元層が3~5cm以深に発達）。
生物相の特徴	干潟表面にはインダタミやケフサイソガニが優占的に棲息し、稀ではあるがウミニナやカワアイが発見された。底質中では、ヤマトキョウスチロリ、オトヒメゴカイ科の <i>Gyptis</i> 属の1種、コアシギボシイソメ、スジホシムシモドキ、ハサミシャコエビが多産した。ミサキギボシムシらしきものも見られた。ハザクラが低密度ではあるが棲息していることは特筆される。コンクリートブロックにはクログチが見られた。
調査者氏名	木村妙子、木村昭一、西川輝昭
調査年月日	2003年6月15日

干潟の名称	五ヶ所湾（伊勢路川）
干潟の所在地	三重県南勢町の五ヶ所湾内
干潟の面積	
干潟の地形タイプ	河口干潟
干潟の底質	礫まじりの泥質で還元層は1～3cm以深。ただし、ハマボウ群落脇（地点B）は表面直下から還元層が発達する。ハマボウ群落内は砂質。
干潟植生	伊勢路川河口右岸にはハマボウの群落が発達する。地元内瀬区、くまの灘漁協およびNPO法人南勢テクテク会の3者連名の立看板によれば、「かつて河口を覆っていた広大なこの群落は、河川改修や潮位の変化でやせ細りましたが、今なお日本最大」とのことである。この群落のわきに、ヨシ原やフクドの群落が小規模ながら存在する。 なお、2003年7月14日の補完調査では、他に、シオクグ、ハマサジ、ハマウド、ヤナギタデを確認した。（豊橋市自然史博物館学芸員、藤原直子氏同定）
干潟の特徴	ハマボウ群落を伴い、護岸堤（一部建設中）に囲まれた、比較的小規模の干潟で、表面には緑藻類（ボウアオノリやアナアオサ）が見られた。
生物相の特徴	ウミニナ、ホソウミニナ、ヘナタリ、カワアイ、ヒメコザラ、オキシジミといった貝類、チゴガニ、ケフサイソガニ、ハサミシャコエビなど甲殻類、チロリ科の <i>Glycera macintoshi</i> やミズヒキゴカイといった多毛類が目立つ。なお、ハマボウ群落内には、****、クリイロカワザンショウ、ムシヤドリカワザンショウなどの巻貝が比較的高密度で生息。ハマボウ群落脇の礫泥底では、埋没している転石の下面に巻貝のミヤコドリが付着していた。
調査者氏名	西川輝昭、木村昭一、木村妙子、藤原直子
調査年月日	2003年6月15日、植生補完調査：2003年7月14日

干潟の名称	伊川津
干潟の所在地	愛知県田原市伊川津町
干潟の面積	
干潟の地形タイプ	前浜干潟, 河口干潟
干潟の底質	前浜(ラインA) 湾口部(ラインC)は砂礫質, 湾内の干潟(ラインB)では泥礫質。
干潟植生	新堀川河口塩生湿地植生: ヨシ群落, フクド, ハマサジ, ヒロハマツナ, ハママツナ, ウラギク, トベラ, ハマウド, ツルナ, シオクグ, テリハノイバラ 湾口部上部植生: ハマゴウ, テリハノイバラ, カワラマツバ, ハマヒルガオ(豊橋市自然史博物館学芸員, 藤原直子氏同定) 湾内の干潟: アナアオサ群落, 干潟後背の池: アマモ群落, 干潟後背の水路: ホソジュズモ群落
干潟の特徴	三河湾湾口部の小さな湾に形成される前浜, 河口干潟である。三河湾奥部の汐川干潟よりも外洋の影響が強い。三河湾有数の良質のアサリ漁場で, 立ち入りは漁協により非常に厳しく規制され, 公的な開発からかなり守られている。この規制のため, 良好な自然環境が保たれているにもかかわらず, これまで生物の調査例がなく, 2003年に愛知県により初めて生物相調査が行われた。地形は複雑で河口の塩生湿地植生や泥っぽい干潟, 礫干潟などさまざまな環境がある。特に干潟周辺に形成される伏流水によると思われる塩水池では三河湾ではほとんど見られないアマモ群落が形成され, 特異な生物群集が認められる。 ラインAは, 潮間帯上部では大型貝類の殻が含まれる砂礫底, 下部では砂礫に泥が混じる。湾奥のラインBは砂泥底で高低差が少ない。ラインCは酸化的な環境の砂礫底である。この上部には砂浜の植物植生が見られる。底生動物だけでなく, 鳥類相や植生も豊富な貴重な干潟である。
生物相の特徴	今回の調査は前浜(ラインA), 湾内の干潟(ラインB), 湾口部(ラインC)と河川内のヨシ原塩性湿地において行われた。その結果, 79種の動物, 3種の植物が確認された。 前浜は有料のアサリ漁場である。全体的にイシダタミが優占している。アサリは下部より上部に多かった。潮間帯上部にはその他にホソウミニナ, クチバガイ, イシイソゴカイ, スナイソゴカイが生息していた。下部はスジホシムシモドキとそれに寄生するスジホシムシヤドリガイが普通に見られた。また, 礫に付着するムラサキガイやナミマガシワが生息していた。湾口部はウミニナが優占している。潮間帯上部にはマガキが優占し, 礫やマガキに付着するウスヒザラガイ, ヒメケハダヒザラガイが生息し, 礫の下にはケフサイソガニが多い。下部にはテッポウエビとそれに共生するスジハゼA種, ドチクチュムシ, チリメンイトゴカイが生息していた。湾口部はアサリの保護水面で大型のアサリが優占していた。ヒモイカリナマコが多く, これに寄生するヒモイカリナマコツマミガイが見られた。このライン上部には砂浜の植物植生が見られる。ヨシ群落の塩生湿地には, ウミニナ類数種と****類数種が見られた。
調査者氏名	木村妙子・稲田浩三・大島寛俊・木村昭一・金原崇文・堤彬彦・藤岡エリ子・藤原直子・西野友彦
調査年月日	2004年6月5日